

## 人生の儂さと主なる神への信頼

まず、祈りながら詩編 90 編を読んでみよう。だれかが傍にいないなら朗読してみよう。90 編から詩編第 4 巻が始まる (106 編まで)。巻頭はモーセの歌というタイトルである。モーセは「神の人」と呼ばれている。また、モーセの「祈り」であるとタイトルは示す。モーセはヘブライ人をエジプトの奴隷状態から解放する主なる神を指し示す偉大な指導者である。彼は一方で、口の重たい人であったが、他方、「祈りの人」「執り成しの祈りの人」ではなかったか。ピスガの山頂から、約束の地を見はしたが、彼自身は約束の地には入れず、モアブの地で死んだがゆえか (申命記 34:7 によれば、120 歳であるとは言いが)、人生の儂さを歌うこの歌の 3-12 節は葬儀の際の式文や「メメント モリ」、死を覚えて生きるべきことの勧めの文脈で用いられてきた。人はいつか主なる神に呼ばれ、命の息を取られ、死に赴くものである。そのような「運命」(宿命ではない) を生きる者には、神に信頼して生きる他はないし、生きることが許される。神は私たちの「住まい」「隠れ家」である。

### 1. 人生の年月は 70 年、健やかな人で 80 年 (10 節前半)

この詩編は、10 節で「人生の年月は七十年程のもので、健やかな人が八十年」とあると言う。現在の日本社会は「人生 100 年」時代と言うが (政府を当てにせず、老後に自分で備えよということか)、聖書は創世記 6:3 によれば「私の霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉に過ぎないのだから、こうして、人の一生は百二十年となった。」とも語っている。将来サイボーグのようなモノができるかも知れないが、現在世界の長寿者も百二十歳の壁を超えることができないのは事実である。人はいつか死ぬ。死ぬことも恵みであり、死ぬことができない医療の発展 (他方餓死する人たちがいるが) は人を幸福にするのだろうか。生きることから解放されること、「私の霊は人の中に永久にとどまるべきではない。」という表現は、苦悩の中に人を生かしておくに忍びないという意味もあるのかも知れない。

「あなたは人を塵に返し/『人の子よ、帰れ』と仰せになります。千年といえども御日には/昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。」II ペトロ 3:8 には「主のもとでは、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」とある。そこでは、千年に匹敵する一日の重みも語られていることを銘記しておこう。

キリスト教で「帰天」という用語を使う人もあるが、「帰塵」ではないのか? プラトンのように元々永遠の靈魂が天にあり、一時肉体を取ってこの世に生れ、肉体の牢獄から

解放されて永遠の天に帰ると考えることとユダヤ・キリスト教信仰との類似性と異質性（魂と体の一体性）を考慮してみよう。

さて、このような人の儚さは、花を咲かせ、やがて枯れる草花に譬えられる。（5-6節）イザヤ 40:6-7、マルコ 13:30 参照。この文脈では「朝が来れば」が印象的で永遠の曙である。人間の靈魂の不滅性ではなく、神の不滅性、その憐れみ、信実、義の不滅性、この神との関係の不滅性にこそ信頼すべきである。日本的無常、厭世観ではなく、永遠の神と対面する時に制限されている人の事実を神賛美の中に位置付けているのである。

## 2. 神の怒りと人間の死（7-9節、11節）

藤木正三は、いかなる長寿による死も「犬死」であると言う。死はどこかで罪の棘を持っており、イスラエルの信仰では「神の怒り」と結びつけられている。「あなたの怒りにわたしたちは絶え入り/あなたの憤りに恐れます。あなたはわたしたちの罪を御前に/隠れた罪を御顔の光に置かれます。わたしたちの生涯は御怒りに消え去り/人生はため息ように消え去ります。」「御怒りの力を誰が知りえましょうか。あなたを敬うにつれて/あなたの憤りをも知ることでしょう。」インディアンに献身的に宣教したブレーナードは死に臨んで神の恐ろしさを感じ、それは今までの予想を超えたものであると語っている。聖なる者、霊に導かれているからこそその経験であり、信仰、悟性、感性の鈍い者たちは余りに安価な恵みとしての赦しを妄信してはいないか？！「あなたを敬うにつれて/あなたの憤りをも知ることでしょう。」という、神と直面して生きる精神的深み、恐れと慄きを味わってみよう。死は罪との関係において苦いものとなる。棘を抜かれた死を死ぬ人は幸いである。I コリント 15:54-57 参照。

## 3. メメント モリ（死を覚えよ）

詩編 90:12 は「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができるよう。」と祈る。一方で、死をいたずらに恐れず、他方、死を無視して無軌道に生きるのではなく、生きる日数を「正しく数えて」生きることができるよう。それこそが「知恵ある心」であろう。

## 4. 主なる神への呼び掛けと信頼（1-2節、13-15節）

この詩は「主よ」（ここでは、アドナイ＝主人）の呼び掛けで始まり、「あなたはあらゆる世代にわたり、われわれの住まう場所である」と告白する。神は山々が生み出される以前から、あるいは、地と世界が形造られる以前から神であり、また未来に向けては、とこしえに、「あなたは神である」と言う。

「主よ（Yahwah）、向き直して、回心してください！」と叫ぶ。本来、回心すべきは人

の側であるが、ここでは主なる神に向かって「心を変えてください。立ち帰って下さい」と願う。口語訳聖書：「主よ、み心を変えてください。」怒りから憐れみ・赦しへの転心である！

「いつまでわれわれを捨てておかれるのですか。」（ヘブライ語では、あなたの僕らに共感共苦をいつまで持って下さいますか？ である）。「怒り」に相当する語は原文にはない。あるいは、「いつまで（怒られているのですか）、あなたの僕らを憐れんでください」とも理解できようか。

14節では「朝にはあなたの慈しみに満ちたらせ、生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください」と祈る。直訳「おお、わたしたちを満足させ、わたしたちが喜べるように、そして毎日楽しく過ごせるように、早く（「いつまで」に対して）、あなたの慈しみを（お与えください）」である。

15節では「あなたがわたしたちを苦しめた日々と/苦難に遭わせた年月を思って/わたしたちに喜びを返してください」と願っている。直訳：「あなたが悩みを与えてきた日々を、われわれが邪悪を見せられてきた年月を、それらに相応してわたしたちを楽しませてください。」

わたしたちは苦難と喜びの両方を神から受け取ろう。「その健やかなときも病めるときも、順風のときも逆境の時も、これを愛するか」という結婚式の式文のように。ヨブ 1:21「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」さらに、10節「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」知恵文学の響きである。

##### 5. わたしたちの手の働きを確かなものにしてください（17節）

この詩の最後にフレーズは、「あなたの僕らが御業を仰ぎ/子らもあなたの威光を仰ぐことができますように。」という祈りで始まる。信仰とは信じて、「仰ぐ」ことである。わたしたちの目は何に向かっているだろう？ 自分自身かこの世の仕事かこの世の富や名声か？

信仰者は神の御業を仰ぎ見る。

そして、「主の喜び（美しさ）、わたしたちの神の喜びがわたしたちの上にありますように」と祈る。祝祷の響きである。

最後は、信仰者たちの働きを主なる神が確かなものとしてくださることを願う。修辭学的美しさのある結びである。神だけがわたしたちの業を確立させてくださる。